

れきし ぶんかざい
かみのやま歴史・文化財さんぽ

第2号 (平成29年10月)



かいせんだう
蟹仙洞

はくぶつかん
博物館

上山市矢来 4-111-3



かいせんだうはくぶつかん
文じい「ここが蟹仙洞博物館じゃ。」
ミドリ「これで“かいせんだう”と読むの？」
文じい「“蟹”は“かに”のことで、“かい”と読む。むかし、この広いお屋敷に大きなはせがわせいしこうじょう“長谷川製糸工場”と長谷川家の住宅があったのじゃ。」
あゆむ「製糸工場というのは？」
文じい「かいこ蚕まゆがつくった繭から糸きいと(生糸)をとる工場のことだ。生糸は織おって絹織物きぬおりものになる。絹は高級品じゃからな。」
ミドリ「それが、どうして博物館になったの？」
文じい「社長の長谷川謙三けんぞうさんが蔵を博物館につくり直し、蟹のようにゆっくり進もうということでこの名前をつけたのだそうじゃ。謙三さんが集められたすばらしい宝物が展示されておる。」
あゆむ「たからもの？ よし入ろう！」
文じい「まあまあ、あわてないで。ほら、

こういち
長谷川浩一さんが来て下さった。」

みんな「こんにちは！よろしくお願ひします。」

ふみお「お屋敷の中を通るんだね。」

ミドリ「一つ一つの部屋にいろんなものがあるわ。」

あゆむ「これもお宝かな？」

文じい「ま、そうじゃが、この先が展示している建物じゃ。」

ふみお「写真もたくさんはってあるね。」

文じい「うむ。それも後にして、まず展示館に入らせていただこう。」

ミドリ「なにかお盆のようなものがたくさん並んでいるわ。」

文じい「ここで一番のお宝になるのはどれかな。」

あゆむ「なんか、みんな同じに見えるな。」

ミドリ「このお盆がいいわ。」

文じい「なるほど。このお盆は2つとも県の指定してい有形文化財ゆうけいぶんかざいになっておる。」

あゆむ「何か書いてある。」

ミドリ「明時代？」

文じい「“明”は“みん”と読む。中国で明という国が力を広めた時代があったが、そのころのものじゃ。何百年もの昔じゃ。日本では“室町時代むろまちじだい”というころじゃ。」

ふみお「それから、“しゅ”なんとか、あと“おながとり”、それに“ぼん”・・・。」

文じい「そのへんまで読めるんだね。これはね、ついしゅ“堆朱”そして、ぼたんおながどりぼん“牡丹尾長鳥盆”。」



ミドリ「あ、鳥が回って追いかけるように二羽飛んでいるわ。これが尾長鳥ね。そしてまわりに花、これがぼたんの花ね。」

文じい「その通りじゃ。」

あゆむ「となりのこちらは、でかい花だ。」

ミドリ「よく見ると葉もあるわ。」

文じい「その通り。“擬宝珠”^{ぎぼし}という花を3つ、それにつぼみと葉、茎を描いている。“擬宝珠堆朱盆”^{ぎぼしついでしゆぼん}という。」

ミドリ「たくさん咲いて、まるで生き生きとおどっているみたい。」



ふみお「ところで文じい、“堆朱”と言ったけど、それって何？」

文じい「それなんじゃが、堆朱^{うしぬ}というのは、朱色^{うし}の漆^ぬを何回も重ねて塗って厚くし（堆）、それを彫^ほって文様を表したものをいう。工夫と技と力がこめられておる。」

ふみお「ふうん。それじゃこっちの小物入れみたいなのは何？」

文じい「おお、これこそ国の重要文化財に指定されている“楼閣人物填漆筆筒”^{ろうかくじんぶつてんしつたんす}じゃ。」
あゆむ「タンスか。」



文じい「“楼閣”^{ろうかく}というのは、何階かある建物のこと。人物はわかるね。“填漆”^{てんしつ}は、漆を塗った面を彫^うって、そのみぞに色漆を埋めていくやり方をいう。それでできた筆筒^{たんす}じゃ。」

あゆむ「引き出しがおもしろい。上から4，3，2，1となっている。」

文じい「ほほう、よく見つけたな。右側にあるものは、引き出しをふさぐ扉^{とびら}じゃ。」

ミドリ「よく見ると、木や建物、動物などいろいろなものが彫^ほられているわね。」

文じい「そう、それに扉^{かなぐ}の金具は、金がつけられている。朱色に緑、黄、黒などで飾^{かざ}られており、はなやかじゃな。」

あゆむ「もどって、ほかも見ようよ。」

ふみお「そう、さっきの写真。」

文じい「うむ、長谷川謙三さんが、むかしではとてもめずらしい写真をたくさん撮^とっておってな、今では貴重な資料^{きちよう}にもなっておる。そのほかにも、刀、絵、人形などの宝^{たま}がたくさんあり、建物も“蘭蔵”^{らんざう}、“糸蔵”^{いとぐら}、“荷造り場”^{にづくば}など、国の登録有形文化財^{とうろくけうけいぶんかざい}に指定されておる。今日はここまで、ぜひまた来ることにしよう。」

みんな「長谷川さん、ありがとうございました。」